

月例研究会（2008年9月24日）

農民運動「右派」指導者平野力三 の戦中・戦後

——農地制度改革同盟での活動を中心に

横関 至

本報告では、「右派」と評されていた平野力三が戦後の農民組合結成，社会党創立において中心的役割を果たした理由を探るために，戦中・戦後の平野の行動と思想を検討した。

農民運動出身の政治家のうち，平野や吉田賢一らいわゆる右派の人々は分析の対象になることが少なかった。「右派」と規定すればそれで判ったようになるという思考が存在した。「右派」は政治権力・資本家・地主に結びついた存在であり「反共」を掲げ運動に分裂を持ちこむ「反共分裂主義者」という認識があった。ところで，農民運動は農民の生活の改善，「人間らしさ」の復活を求める運動であり，人道主義者，社会主義者，キリスト教徒など様々な思想傾向の人が参加した。そうした農民運動における「左派」と「右派」は，要求項目や活動形態はほぼ同じであった。農民運動指導者の思想の違いで区分されていた。農民運動指導者の評価基準は，農民の生活の向上と権利の確保にどれだけ役立っているかどうかである。「右派」であろうと，「左派」であろうと，判断基準はここにある。こうした判断基準にもとづいて平野力三の評価の再検討をおこなった。

平野は小作地の国有化を中心的主張とする農

地改革論を一貫して提唱し，農地制度改革同盟を組織して戦時下でも大衆の運動の必要を説いた。それは，農民の生活の向上と権利の確保に役立つものであった。農地制度改革同盟の活動を通して，須永好や野溝勝と強い結びつきが形成された。この戦時下の行動と人的関係こそ，平野が戦後の農民組合結成，社会党創立において中心的役割を果たすことを可能にしたものであった。

議論の中心は次の3点であった。まず、「右派」，「左派」という規定については，運動上の言い方と研究者による「レッテルはり」とが混在しており，整理して議論しないと混乱するであろうとの指摘があった。報告者はそれに賛意を示し，そうした混乱を避けるためにも「右派」についての具体的研究の積み重ねが重要となると答えた。次に，平野の小作地国有論は政府の自作農創設とどのような点で違うのかという問いがあった。これに対しては，自作農創設では景気変動によって再び小作農に転化する機会が多いと考えた平野は家産制自作農の育成を図るための手段としての小作地国有を提唱したと答えた。最後に，平野の主張は「農民エゴイズム」からきており，平野は自己の政治活動のために農民を喰い物にしたのではないかという質問があった。報告者は，「エゴイズム」という表現を使用するのであれば様々な要求を実現しようとする大衆的運動である社会運動は全て「エゴイズム」であったということで片付けられてしまうと述べ，こうした見解には反対であるとの立場を表明した。

（よこぜき・いたる 法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員）